

南部植民地における生活水準

——実像・比較・変容——

和 田 光 弘

Such autopsy results make it sound as if the three lived in a poor neighborhood or an underdeveloped country. Actually, they were quite wealthy, but they lived in a different era: the colonial period in America.

—TIME, April 18, 1994 No.16

はじめに

1994年4月18日の『タイム』誌に“Tales from the Crypt”と題する興味深い記事が載った⁽¹⁾。1992年、メリーランド州のトウモロコシ畑で、鉛の棺に納められた3体の遺体が発見され、調査の結果、1682年に死亡したメリーランド植民地総督フィリップ・カルヴァートと最初の妻アン、そして2番目の妻との間にできた娘であることが判明したのである。遺体の保存状態は極めて良好で、死因に結びつく3人の生前の病状も明らかとなった。すなわち、55歳で自然死したアンは、関節炎、骨粗鬆症、栄養失調を病み、足の骨には骨折治療の失敗と思われる大きな膿瘍があった。乳児の娘は同じく栄養失調で、直接の死因は髄膜炎および脳炎と推定され、総督自身は、おそらくは心不全により50歳で死亡したが、晩年は肥満のため、ほとんど身体を動かすことができなかつたとみられる。このような事実から、記事は「17世紀のアメリカでの生活の厳しさ」を指摘し、現代の発展途上国での生活状況になぞらえて解説しているのである。遺体の調査で得られたこれらの知見は貴重なものであり、示唆に富むが、翻って当時の社会構成の全体像からするならば、総督一家という、いわば頂点の一例に過ぎないとも言える。では、歴史学の立場から、当時の人々の生活の全体像を描きだそうとするならば、どのようなアプローチが可能なのであろうか。

実際のところ、17・18世紀の生活史をテーマとした彼の地における研究は、衣食住すべてにわたって精力的に進められており、大きな成果をあげつつある。とりわけ生活水準・消費水準に対する関心は高く、生活史研究そのものといつても過言ではない。それはひとつには、ヨーロッパ史の分野で、工業化に先立つ「消費革命」の存在が次第に明らかにされ、工業化の前提となる需要の創出に大きな役割を果たしたことが指摘されるようになったこととも関連している⁽²⁾。このように「生産・供給」から「消費・需要」へと研究者の関心がシフトするにつれ、大西洋貿易を介してヨーロッパ経済と連動していたアメリカ植民地における消費活動のあり方

に目が向けられるようになったのも、故なしとしない。イギリス本国とアメリカ植民地での生活水準の比較が試みられ⁽³⁾、大西洋移動前後での——工業化前後でなく——生活水準論争といったうがった表現も使われている⁽⁴⁾。またOAHの1987年大会では、植民地時代の生活水準をテーマにシンポジウムが開かれ、最新の研究成果が披露された⁽⁵⁾。さらに「消費革命」のとらえ方をめぐっては、植民地時代を越えて、19世紀前半の農民像——自律重視型か市場重視型か——の論争にまで展開している⁽⁶⁾。

しかしこのように注目される「生活水準」とは、具体的にどのような尺度で把握することが可能なのであろうか。むろん広い意味での衣食住であるが、多角的・客観的に測る指標として、L・S・ウォルシュは7点ほど指摘している⁽⁷⁾。すなわち、(1)自然環境、(2)住環境、(3)労働環境、(4)栄養摂取状況⁽⁸⁾、(5)死亡率・罹病率、(6)出生率・婚姻率、(7)消費財の所有状況、である。(4)・(5)・(6)は、人口史や食生活史とも切り結ぶ指標であり、すでに拙稿でも論じている⁽⁹⁾。ここで特に注目されるのは(2)と(7)、とりわけ後者であり、これは現在、植民地時代史研究における最もホットなテーマといえる。本稿では、もっぱら南部のチェサピーク植民地を対象に、これら消費財で表される消費水準に焦点をあてて論じてゆくことにしたい。分析の際のデータ・ソースとしては主に「財産目録 inventory」が使用されるが、その問題点と対応策について最初に簡単に触れておきたい⁽¹⁰⁾。財産目録は計量分析を可能にするが、基本的に「遺産目録」として作成されるため、(1)年長者の割合が多い、(2)富裕者の割合が多い、というバイアスを持っている。また、時系列で観察する場合、(3)通貨単位（タバコ表示・スターリング表示・カレンシー表示）⁽¹¹⁾を揃える、(4)物価指数でデフレートする、必要がある。(1)・(2)は大きなバイアスとならない場合もあるが、主として、ライフサイクル別・社会層別に分類・分析することで問題の発生を回避する（すなわち人口全体に関する状況復元をあえておこなわない）。(3)については為替レートの適用⁽¹²⁾、(4)は適当な物価指数⁽¹³⁾で調整することによって、時系列上の分析が可能となるのである。

1. 実像 ——ロバート・コールの世界——

植民地時代の生活水準・消費水準を時系列上で観察すると、後半に大きな変化を確認することができる。その詳細は第3章で述べるが、ここではまず、変化の生じる以前、17世紀の生活状況について見てゆくことにしたい。南部植民地において、17世紀の生活状況を再現する手がかりはかなり限られているが、ある程度まとまった史料の残っている極めて稀な例として、ロバート・コール Robert Cole のプランテーションをあげることができる⁽¹⁴⁾。彼は1628年頃、イギリスのミドルセックス州に生まれたカトリック教徒で、1652年、妻レベッカと4人の子供（レベッカは再婚なので、少なくとも2人は彼女の連れ子）、2人のサーヴァントと共にメリーランド植民地セントメリーズ郡に入植した。1662年、単身でイギリスへの一時帰国を計画し、もし

もの時のために遺言状と財産目録を作成して、隣人2人（うち1人はL・ガーディナー）とロンドン在住のいとこを遺言執行人に指名した。この間、レベッカが死亡したが、計画は変更せず、春のタバコ輸送船でイギリスへと向かっている。しかし1663年の史料では死亡が確認されており、正確な死亡場所・年月日は不明である。一方、ロバートの死後、遺言執行人としてコール・プランテーションの経営を監督したガーディナー——他の2人は死亡——は、1673年、ロバートの長男ロバート・コール・ジュニアによって訴えられる。当時の裁判は、必ずしも双方の深刻な対立を意味するものではなく⁽¹⁵⁾、ジュニアも、プランテーション経営をめぐるガーディナーとの争いに、手早く決着をつけようとして訴訟をおこしたものと考えられる。ともあれ裁判の過程で、判事は詳細な会計帳簿の提出をガーディナーに命じ、これが法廷記録として残ることとなった。かくしてロバート自身の手になる遺言状・財産目録と、ガーディナーの手になる会計帳簿の3点が、1662年初頭から1673年半ばにかけてのコール一家の生活状況を、われわれに垣間見せてくれことになったのである⁽¹⁶⁾。

ではロバート・コールは、当時のメリーランド植民地社会において、どのような階層に位置づけられる人物だったのであろうか。もし彼が極端な上流階級か下層階級に属しているならば、17世紀南部植民地人の典型例として述べることはできないからである。ロバート自身は遺言状のなかで自らを“yeoman”と称しているが⁽¹⁷⁾、陪審員も務めており、隣人からは“mister”とか“gentleman”と呼ばれていた⁽¹⁸⁾。また、彼の入植したセントメリーズ郡において、1658年から1665年にかけて財産目録を残した者は、彼を含めて43名にのぼるが、この目録から算出された資産総額に基づく彼のランクは第7位となっている⁽¹⁹⁾。これらのことから、彼はいわゆる「ジェントリ」ではないものの、ある程度裕福な「ヨーマン・プランター」であったと言うことができる⁽²⁰⁾。したがって「中のやや上」ではあるが、当時のプランターの典型例として、以下、彼ら一家の生活振りを見てゆくことにしたい。

まず、彼らの収入と支出から、プランテーションでの生活の実態を探ってみよう。収入をまとめたのが表1である。タバコへの依存度が圧倒的に高く、生産の多角化の進展はいまだ認められない。タバコは海外市場向け商品作物であるが、コール・プランテーションでは家畜・穀物等を地域市場で売却し、こちらからもある程度の収入を得ていたことがわかる。食料等は基本的に自給自足だが、このいわば市場経済に組み込まれていない経済活動＝自家消費分を、仮

表1 コール・プランテーションの収入（£）
[1662-1672年の年平均値]

輸出による収入	地域市場との取引による収入					自家消費分 の推計
	家畜	牛乳・乳製品	穀物	果物	その他・不明	
タバコ	7.98	0.34	0.19	0.39	4.26	31.20
25.15						
36.2%	18.9%					44.9%

Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole's World*, 78, 80より作成

表2 コール・プランテーションの支出
[1662-1672年の年平均値]

費目	£	%
被服費	12.64	31.9
仕立て代	1.46	3.7
年季契約奉公人関係費（解放給与等）	5.51	13.9
女中の賃金	1.36	3.4
食費	2.18	5.5
農具代	0.38	0.9
樽代	1.44	3.6
地代	0.71	1.8
税金	1.60	4.0
家屋修理費	0.84	2.1
医療費・教育費	2.33	5.9
雑費（植民地産品・サービス）	4.03	10.2
雑費（輸入品・サービス）	1.36	3.4
不明	3.83	9.7
合計	39.67	100.0

Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole's World*, 83より計算作成

に市場で評価するとした場合の推計額は、タバコからの収入を上回っている。さらに推計額の経年変化は緩やかで、不安定な海外市場でのタバコ取引をヘッジし、生活水準を安定させる要因となったと考えられる⁽²¹⁾。しかしながら時系列上で経営状況をみた場合、着実な資産の増加は認められるものの、大幅な成長は確認されない。これはひとつには、ガーディナーの安定経営の方針にもよるが、当時の農業システムに一般的にみられる特徴ともいえる。すなわち、タバコ以外の市場が極端に小さく、しかもタバコ生産には規模の経済効果が働かないため、成長へのインセンティヴが弱く、経済成長に天井が存在していたのである⁽²²⁾。一方、支出状況は表2に示されている。ここにおいても、海外市場、とりわけイギリス本国への依存の大きさが確認される。布地、服、靴、香辛料、酒、石鹼など⁽²³⁾、イギリスからの商品に払う被服費、食費、雑費に、年季契約奉公人関係費を加えると、支出総額のほぼ半分に達する。もちろん仕立て代、女中の賃金、家屋修理費、医療費、教育費など、当地で入手する財・サービスも多く、地域市場への依存も同時に観察される。しかし、多くのイギリス製品を購入するこのコール一家から、完全な自給自足のフロンティア農民像をイメージすることは難しく、支出構造でも文字どおり「植民地型」であったといえよう。

さて、以下では具体的に、コール一家の生活状況を再現してゆくことにしよう。まず彼らの住居であるが、これはかなり貧弱と言わざるをえない。いわゆる掘立柱建物で、15年から20年程度しかもたなかったと考えられるが、煉瓦や石を基礎に置くものよりも早く安く建てられ、実際、メリーランド植民地初代総督もこのタイプの家に住んでいた。外壁や屋根には下見板を

張るのが一般的で、こけら板は17世紀末になるまで現われない。下見板は雨風を完全には防げず、また腐敗しやすかったが、タルを塗ると、今度は逆に火災の危険が増大した。財産目録の部屋別分類から推定されるロバート・コールの家屋の構造は、「ホール hall」と「キッチン kitchen」の2部屋構成で、それぞれの部屋の上に「ロフト loft」がつくられていた。ホールはメイン・ルームで、煉瓦造りの暖炉がおかれ、床は板張りで、壁には漆喰が塗られ、開き窓にはガラスが入っていたと考えられる。一方キッチンは、土間で、壁に漆喰は塗られず、窓には木の扉がついていたらしい。このキッチンで料理の下ごしらえがなされたが、火がないため、最終的な調理はホールの暖炉でおこなわれた。食事は全員がホールでとり、就寝は、コール一家が、暖かいホールおよびその上のロフトを使い、年季奉公人たちは、キッチンおよびその上のロフトで寝た。ホールとキッチンの間には暖炉の煙突が通っていたが、おそらくは荒打ち漆喰（編み枝に粘土・泥を塗ったもの）造りで、火災の危険性が高かったと思われる。実はこのように、耐久性が低く、各部屋が多目的に使われる住居の構造は、コール一家のみならず、当時のすべての階層の家屋に共通して見られる特徴であった。貧しいプランターは、1部屋の家屋が普通だったので当然とも言えるが、部屋数が多い——もしくは奉公人用に別棟を持つ——大プランターの屋敷も同様で、チェサピークのプランターたちが、もっぱらタバコ作りを優先し、家屋の居住性の向上にまで十分手が回らなかった状況が推察されるのである⁽²⁴⁾。

さて次に、食生活についてであるが、これは拙稿でも詳説したので簡単に概観するにとどめたい⁽²⁵⁾。当時の食事はいわゆる“one-pot meal”で、日々食されたのは乾燥トウモロコシであった。トウモロコシは挽いてふるいにかけ、粗い粉と細かい粉とに分けられるが、この粗い粉を煮て粥状にしたものが“hominy”と呼ばれ、いわば主食である。これに塩漬けの豚肉・牛肉や豆などを加えれば、栄養価は十分であった。細かい粉は水かミルクを加えて焼かれ、トウモロコシパンが作られたが、バターを塗るか hominy に浸すかして食された。飲み物としては、ミルクやリンゴ酒、ペリー（梨の果汁を発酵させたもの）、ビールなどで、これらがなければ水——メリーランドでは主に泉から、ヴァージニアでは井戸から汲む——が飲まれた。コール・プランテーションではおそらく、家族も年季奉公人も、同じものを一緒に食べたと思われるが、その食事内容は栄養不足とはまったく無縁であった。これは貧しいプランターも同様で、せいぜい食材のバラエティが減る程度にすぎず、逆に大プランターも、輸入酒や小麦粉のパンなどを年季奉公人とは別の食卓で食していたとはいえ、根本的な差異はなく、全階層を通じて必要十分な食生活の状況が窺われる所以である⁽²⁶⁾。

さて次に、財産目録から検証される消費財の中心ともいえる家財道具について見てみることにしよう⁽²⁷⁾。まず寝具であるが、これは布団（bed）と、その布団を床から浮かせる寝台（bedstead）とに分けて観察しなければならない。布団は羽毛入りのものが、毛くずや藁の入ったものよりも上質とされていたが、必需品ゆえに極端な階層差はない。階層差が見られるのは寝台で、これを持っている者はかなり上のランクに属しており、さらに寝台に飾りカーテ

ン——プライバシーを保護し、寒さを防ぐ——を付けている者はごく一部にすぎない。コール家では、羽毛布団が使われてはいたものの、寝台はなく、同レベルのプランターと比較して、少々見劣りのする部分といえる。この羽毛布団は、日中は部屋の隅に丸められるか、戸棚の中に詰め込まれていたと考えられるが、就寝に使われる部屋、とくにホールを、日中、広く有効に使う上手な手段であり、コール家の場合、寝台を買えなかったというよりも、家の狭さゆえ、むしろ買わなかつたというべきであろう。

次に椅子——背もたれ付きの1人用——であるが、当時はステイタス性の高い財として認識されていた。コール家には、おそらくイギリスから持ってきた木製の椅子5脚と、チェア・テーブル——日中はテーブルとして用い、夜は寝具のスペースを空けるためにテーブルの部分を折り畳み、椅子状にする——1脚があり、数は多いといえる。大プランターで椅子79脚を所有していた例もあるが、貧しいプランターは椅子を持っていないことも普通で、収納箱を椅子やテーブルの代わりに使ったり、丸太や下見板で間に合わせのものを作ったり、場合によっては床にじかに座ったりした。

次に食器類であるが、多くは木製か、しろめ（ピューター）製⁽²⁸⁾、陶器はコール家でも所有していたが安価とはいえず、あまり一般的ではなかった。食事の際には、木製かしろめ製のスプーンを用い、貧しい家では貝殻を使ったり、手で食べたりした。食事にフォークを使うのは、当時イギリスでもまだ新しい習慣で、十分普及していなかった。食器の数も一般には少なく、しろめ製ポットなどは回し飲みで、属人性の確立は認められない。コール家には、テーブルクロスやナプキンの類があったが、このランクでは珍しい部類に入る。

さて照明関係では、財産目録に燭台と芯（獣脂の中で燃やす）が挙げられており、コール家の豊かさがある程度見て取れるものの、蠟燭自体への言及はない。

また、コールは所持していないが、大プランターは“chamber pot”“closetool”と呼ばれる室内用便器を持つ例があり、「西洋文明」の興味深い一面が窺われる。このような便器のない家では、家の外で——尾籠な話で恐縮だが、発掘調査の所見ではドアのすぐ外で——用を足していたらしい。もっとも便器のある家でも、家のすぐ外に捨てていたらしく、当時の衛生観念の低さと、悪臭に対する鈍感さが推察される。

さて、衣食住で最後になったが、衣類についてはいまだ自給化の進展は見られず、本国などから輸入される粗い布地等が購入されていた。コールの財産目録に出てくる最も高価な生地はリネンの“fine Holland”で、ハンカチ2枚と記されている。チェサピークで最も人気が高く、広く用いられていたのは、“blue linen”と呼ばれる安価な布地で、半ズボンやコートなどには“serge”（ウッルンとウステッドの混織）が使われた。コールの財産目録に見られるその他の生地は、リネンでは“lockram”，非常に粗いリネンでは“canvas”や“osnaburg”，粗いウッルンでは“kersey”，“penistone”，“cotton”（綿ではなく、表面の毛足が長い毛織物）などがある⁽²⁹⁾。

表3 世帯形成に必要な家財道具（メリーランド植民地・1700年頃）

必需品		必要度1		必要度2		必要度3		必要度4	
毛げ入布団	20s	羽毛布団	45s	寝台	2s	替えシーツ(複数)	10s	飾りカーテン	20s
藁布団	10s			聖書	3s				
鉄製ホット・掛け鉤 (各2)	10s	フライパン	1s6d	真鍮製足付フライパン	5s	真鍮製やかん	5s	鉄製ホット・掛け鉤 はさみ(火はね等) ・フォーク	6s
しろめ製ショッキ	1s	アリヰ製フライパン	6d	アリヰ製皿(複数)	2s			焼き網	1s
しろめ製水鉢	2s	しろめ製皿(複数)	8s	しろめ製皿(複数)	8s			(炉の)薪のせ台	12s
木鉢(複数)	1s	木製トレイ(複数)		陶器	2s			燭台	1s
ナイフ	1s	ふるい		ミル皿(複数)	1s	水差し	1s		
スプーン(複数)	6d			がねん(複数)	2s				
鉄製きぬ	4s			手回し式挽き臼	20s				
テーブル・ベンチ	3s			椅子なしストゥール	1s	テーブル(追加)	3s	椅子(3)	6s
収納箱	3s6d	トランク	5s	収納箱(追加)	3s	テーブルクロス・ナキン	10s		
箱	1s					収納箱(追加)	3s	鞍・馬勒	10s
手桶(2)	2s			木製桶(複数)	2s	桶・樽	10s		
				剃刀・剃刀用砥石	3s	銃	12s		
				アロマ	1s				
小計	59s	小計	62s	小計	55s	小計	54s	小計	57s
累計	£2.95	累計	£6.05	累計	£8.80	累計	£11.50	累計	£14.35

Main, *Tobacco Colony*, 176より作成

ともあれ、コール家の家財はかなり豊富で、これは彼らが年季契約奉公人ではなく、自由移民として入植したことと関係している。すなわち、年季契約奉公人は、通常、身一つで大西洋を渡ってきたのだが、自由移民は、ある程度の家財と一緒に持ってくるか、あとから送らせたのである。入植の時点で、コール一家はすでにアドバンテージを得ていたのだといえよう⁽³⁰⁾。

それではもし、年季奉公人から出発し、解放後、世帯形成をおこなう場合、どのような家財を揃える必要があったのだろうか。表3は、世帯形成に必要とされる家財道具を、その必要度に応じて分類したものである。馴染みの薄い品目もあり、少々補足説明を加えておこう⁽³¹⁾。まず必需品の「掛け鉤」は、鉄の鎖とともに用いて、火の上にポット等を吊すものである。必要度1の「フライパン」はほとんどが鉄製。「ふるい」は針金や馬の毛で作られ、挽いたトウモロコシ粉の選別等をおこなった。必要度2の「真鍮製足付フライパン」は、3本ないし4本の足を持ち、水を沸かしたり、シチューを煮込んだりする。「木製桶」は肉を塩漬けにする際に用いる。必要度3の「真鍮製やかん」すなわち“kettle”は、口が底と比べて広いデザインで、その逆の特徴を持つ“pot”と区別される。

さて、以上、コール家を中心に17世紀のプランターの生活状況を見てきたが、ここで得られた重要な知見は、この時代の生活水準が、財産の多少や社会的地位の高低に大きく左右されていないという事実である。少なくとも、大プランターと中規模プランターの間には、衣食住において大きな差は認められない。つまり、いわゆる「消費革命」(第3章で詳述)の進展以前の

段階では、基本的な生活水準をサポートする家財がいったん入手されるや、それ以上、所有者のステータスを明確に反映する家財の特定のコンビネーションは存在していなかった。極端な言い方をするならば、17世紀の貧しさは、階層を越えて普遍的であったとしてもできよう⁽³²⁾。ヴァジニアを訪れたある旅行家が、指導的地位にあるプランターの一人について述べた言説は、かかるコンテクストの中に置かれる時、極めて示唆的なものとなる。曰く「彼は金持ちで裕福な暮らしをしているが、家には必需品以外、何も持っていない。良い寝台はあるが、飾りカーテンは付いておらず、木製のストゥールはあるが、籐椅子はない」と⁽³³⁾。

2. 比較 ——メリーランドとグロスターシア——

前章では、コール一家を中心に、主として17世紀の生活状況について見てきたわけだが、これを第一帝国という幅広いパースペクティヴに置くとき、ひとつの疑問が生じる。すなわち、彼らの植民地での生活水準は、大西洋を渡る以前、つまりイギリス本国における生活水準と比べて、はたして高かったのだろうか、低かったのだろうか。ロバート・コールの場合、カトリックという宗教的因素が移住の動機として大きな位置を占めていたのだが、一般に南部植民地に入植した年季契約奉公人の場合、経済的因素が最大の動機——主要なプッシュ要因・プル要因——と考えられるため、大西洋を挟んでの生活水準の動向は、解明されるべき重要な課題の一つといえる。しかし、本国と南部植民地とを比較する際、イングランドとニューイングランドの比較と異なり⁽³⁴⁾、具体的な対象地域の選択は少々困難である。ここでは、17世紀にチェサピークへの入植者を多く送り出し、本国社会の典型的な一断片を提示しているとされるグロスターシアのバークレー渓谷 Vale of Berkeley を取り上げる。この地域は、セヴァーン川とコツウォルド丘陵に挟まれ、北東にグロスター、南西にブリストルを持つ。この地と、コール一家の入植したメリーランド植民地南西部沿岸地域 Lower Western Shore とを比較検討し、生活水準の高低を調べてみることにしよう。

まず最初に、バークレー渓谷の社会経済状況を概観する必要がある⁽³⁵⁾。高品質のチーズ生産で名高い肥沃な土地であるが、成人男性のうち農業に従事している者は25~35%に過ぎず、40%以上は毛織物産業で働いていた。とりわけコツウォルド丘陵沿いの地域は、広幅織生産の中心地として知られ、17世紀の基準からするならば、バークレー渓谷は主要な工業地帯であったといえる。この地の支配者層の構成は必ずしも閉鎖的でなく、17世紀後半には、地主=ジェントルマン、毛織物業者、大農業経営者等を合わせて10~15%を占めるのみであり、ヨーマンが中間層の中核を形成していたのである。1660年から1699年にかけて作成された財産目録500点弱を分析したJ・ホーンの研究によれば、資産総額50ポンド以下のいわゆる貧困層は60%に達するものの、教区の救貧を受けなければ生計を維持できないほど極端に貧しい者は、そう多くはなかったと考えられている⁽³⁶⁾。一方、1638年から1705年にかけて作成されたメリーランド南

西部沿岸地域の財産目録を観察するならば、資産総額50ポンド以下の者はほぼ60%程度であるが、後述するようにこの基準は植民地においてはやや高いので、仮に30ポンド以下で見るならば、36~39%となる⁽³⁷⁾。もっとも、メリーランドとバークレー渓谷の資産構成の分布に関して分割表を作成し、 χ^2 検定をほどこしてみると、双方の分布状況に差がないことが確認される⁽³⁸⁾。したがって、財産目録に見る両地域はかなり似通った社会構成を持っており、この点でも両者の消費水準の比較は有意義といえる。しかし財産目録のカバーする範囲にはやはり問題があり、バークレー渓谷で白人成人男性の約30%，メリーランドで60~70%と推計される⁽³⁹⁾。バークレー渓谷で“poorer”が含まれていない点は比較する上で問題なしとしないが、“poor”以上の生活水準を考察するには十分有効であると言えよう。

さてそれでは具体的に、家財道具を中心として、メリーランドとバークレー渓谷の比較をおこなってみよう。ホーンは、財産目録に記載された各家財道具の所有状況を階層別（資産総額別）に分類している——各階層が各家財道具を所有している割合を示している——が、このデータを用い、さらにここで提示された階層区分を前提として、メリーランド南西部沿岸地域とバークレー渓谷のどちらが各家財道具を多く所有していたのか、対応のある母平均の差の検定を実際に計算してみた⁽⁴⁰⁾。表4がその結果である。「米」とあるのがメリーランドで有意に多く所有されていた家財道具、「英」とあるのがバークレー渓谷で有意に多い家財道具である。印のない品目は、双方に有意差がなく、どちらの地域で統計的に多いか断定できない家財道具である。まずバークレー渓谷で多い品目をみてみると、ある程度ステータス性を有する

表4 メリーランドとグロスターシアの家財道具別有意差検定

家財道具	t 値	両側確率	◎
煮物用調理器具	6.922	0.002**	米
炒め物用調理器具	9.571	0.001**	米
焼き物用調理器具	2.857	0.046*	英
その他の調理器具	1.801	0.146	
真鍮製品	3.326	0.029*	英
しろめ製品	2.308	0.082	
鉄製品	1.031	0.361	
土器・炻器	4.435	0.011*	米
陶磁器	1.000	0.374	
ガラス製品	1.180	0.303	
ナイフ	1.843	0.139	
フォーク	1.330	0.254	
スプーン	7.674	0.002**	米
テーブル	2.840	0.047*	英
椅子	2.325	0.081	
ベンチ	12.646	0.000**	英
ストゥール	8.098	0.001**	英
長椅子	4.968	0.008**	英
寝椅子	3.702	0.021*	米
椅子類ナシ	2.922	0.043*	米
食卓用リネン	0.485	0.653	
家庭用リネン	1.221	0.289	
布団	1.731	0.159	
寝台	5.017	0.007**	英
シーツ	0.451	0.676	
(飾り)カーテン	2.018	0.114	
長柄付あんか	0.676	0.536	
食器棚	3.060	0.038*	英
衣装戸棚	3.688	0.021*	英
サイドボード	5.131	0.007**	英
整理タンス	0.978	0.384	
机	0.233	0.827	
収納箱・トランク	0.853	0.442	
照明器具	2.955	0.042*	米
室内用便器	1.117	0.327	
絵画	2.360	0.078	
書籍	2.976	0.041*	米
金銀食器・宝石	2.942	0.042*	英
時計	2.810	0.048*	英

◎：数値が有意に大きい方の地域

* : 5 %で有意 ** : 1 %で有意

とされる財、すなわちテーブル、椅子類、寝台、収納家具、時計、奢侈品等があがっている。なかでも、テーブル、椅子類、寝台は、本国ではかなり貧しい家庭でも所有していたところから、植民地と比べた場合の生活水準の高さが確認できる。一方、メリーランドで有意に多く所有する家財道具は、1%で有意な品目として、調理器具、スプーン、5%で有意な品目として、土器類、寝椅子、椅子類ナシ、照明器具、書籍があがっている。1%で有意な品目、また5%で有意な品目でも土器類、椅子類ナシなどから見るかぎり、植民地で有意に多い品目は、ステイタス性が比較的弱く——椅子類ナシはまさにそのもの——、安価な必需品といえる。照明器具、書籍は例外であるが、これらは5%の有意水準をクリアするのみであり、統計上のパフォーマンスは1%に比べて劣るところから、必ずしも重視するにはおよばないとも考えられる。つまり総じて、植民地の方が、安価な必需品を有意に多く所有するという検定結果が得られたのである。しかしこの結果は、本国の家庭で、スプーンなどの基本的な家財道具を所有していなかった——すなわち生活水準が低かった——ということではなく、むしろ本国の財産目録が、あえてこれらの安価な財を記載しなかったのではないか——すなわち、やはり本国の方が生活水準は高い——と解釈するほうが、より説得的であるように思われる。そこでこの仮説を計量的に検証するため、メリーランドで1%および5%で有意な品目、バークレー渓谷で1%で有意な品目に関して、階層（資産総額）に応じたトレンドを算出してみた⁽⁴¹⁾。表5がその結果であり、必ずしも有意でない数値も散見されるが、後者の品目の場合、植民地でも本国でも、豊かな階層ほど多く所有する財であるのに対し、前者の品目は、メリーランドでは豊かな階層ほど多く所有するものの、バークレー渓谷ではむしろ所有が減ってゆくものもあり、階層に対

表5 資産総額に応じた家財道具の所有傾向

家財道具	メリーランド			グロスターシア		
	b ₀	t値	R ²	b ₁	t値	R ²
煮物用調理器具	2.51	3.129	0.766	-2.33	-1.713	0.495
炒め物用調理器具	5.17	6.988"	0.942	-0.34	-0.194	0.012
土器・炻器	15.43	15.039"	0.987	3.18	3.667*	0.818
スプーン	3.62	1.706	0.492	0.55	0.819	0.183
寝椅子	8.47	3.722*	0.822	1.17	2.219	0.621
椅子類ナシ	-18.80	-12.027"	0.980	-7.67	-2.432	0.664
照明器具	14.61	13.417"	0.984	10.07	4.097	0.848
書籍	8.50	3.089	0.761	7.03	5.507*	0.910
ベンチ	9.96	3.458*	0.799	7.38	2.136	0.603
ストゥール	7.47	7.571"	0.950	13.87	4.384*	0.865
長椅子	0.34	1.732	0.500	6.99	4.743*	0.882
寝台	18.14	33.185"	0.997	3.91	3.039	0.755
サイドボード	1.34	5.195*	0.900	9.09	6.077"	0.925

（従属変数） = b₀ + b₁ • (独立変数) [ただし独立変数は資産総額による分類にもとづき1-5をあてる]

* : 5%で有意 ** : 1%で有意

応して増加している場合でも、メリーランドに比べてその増え方はかなり緩やかである⁽⁴²⁾。したがって、メリーランドで有意に多い家財道具は、本国ではあまり重要視されておらず、財産目録にもあげられない可能性が高い。また、チェサピークの財産目録には、本国のものには見られない“old”的語が頻出し、量のみならず質の面でも、本国に劣っていたと考えられる⁽⁴³⁾。つまり当初予想したとおり、財産目録にみる生活水準は、本国の方が植民地を上回っていたのである。

さらに住環境について比較してみると、第1章でも触れたように、17世紀の南部植民地の家屋は貧弱で、ある推計によれば、メリーランドの住居の約3分の2は、3部屋ないしそれより小さい造りとなっており、一方バークレー渓谷では、下層民でも2～5部屋（平均は3.3部屋）を持ち、典型的な家屋は4～6部屋で構成されていた。また建物の質の面からみても、明らかに住環境は本国の方が良好であった⁽⁴⁴⁾。

以上のことから、生活水準全般について、バークレー渓谷の方がメリーランド南西部沿岸地域を上回っており、おそらくは前者の下層民と、後者の中流プランターの生活水準がほぼ同レベルで対応していたものと思われる。そしてメリーランド内部での階層差よりも、本国と比較した絶対的な生活水準の差の方が、より大きかったと考えられるのである⁽⁴⁵⁾。ただし食生活については、唯一例外的に植民地の方が本国を——少なくとも栄養面において——上回っていたことが指摘されており⁽⁴⁶⁾、結論には若干の留保を付ける必要があろう。ともあれ、バークレー渓谷からチェサピークへ入植した人々は、当初、植民地の低い生活水準に適応するのに苦労したであろうことが推測され、J・P・グリーンのいう「単純化」過程における、社会のプリミティヴな状況が窺われるのである⁽⁴⁷⁾。

さて、以上、南部植民地と本国とを比較検討してきたわけだが、では同じ北米植民地の中で、生活水準に差はみられなかったのだろうか。南部植民地以外で生活水準の研究が進展しているのはニューイングランド植民地で、この両者を比較すると、少なくとも17世紀の段階では、後者の方が生活水準は高いようである⁽⁴⁸⁾。その最大の理由として、ニューイングランドでは家族での移住が多く、ある程度資産を有し、平均余命も比較的長かったことが指摘されている。そのため最初から、たとえば耐用年数の長い良質な家屋を建てることも可能で、単身で資産を持たない年季契約奉公人が一般的な移民形態であった南部植民地とは、決定的に異なっていた⁽⁴⁹⁾。南部植民地において、より高い生活水準、より良い生活は、植民地生まれ（ネイティヴ）の2世以降のために残されたのだと言うことができよう。

3. 変容——消費革命の展開——

これまでみてきたように、南部植民地の生活水準は、本国やニューイングランドと比べて低く、しかも階層差があまり大きくないことが確認された。だがこのような状況は、いわゆる「消

「費革命」の到来で、大きく変容することになる。「消費革命」とは、一般的に、質・量ともに急激な消費水準の変化・上昇を指し示す概念といえるが、とくにこの時期について規定するならば、次のようなだろう。すなわち、従来、不要不急の奢侈品とされていた高価な財を、上流階層が明確なステータス・シンボルとして入手するようになり、中流階層が、生活をより快適・便利にする財を、従来のように贅沢品ではなく、むしろ必需品として手に入れるようになり、下層の人々が、従来、十分には入手できなかった必需品を、確実に手にするようになる状況である⁽⁵⁰⁾。結果として、消費財の所有・非所有にもとづく明確な階層区分が出現し、社会の階層性——もっぱら経済的なもので、法的なものではない——が強化されるのである⁽⁵¹⁾。当時、ステータス・シンボルとして機能した財は、たとえば籐椅子、マホガニーの椅子・テーブル、漆塗りのタンス・書き物机、セットの陶磁器類、豪華な燭台、特定用途のグラス・皿、時計などがあげられるが、社会的ステータスが消費様式を決めるのではなく、消費様式こそがステータスを決める「消費社会 consumer society」が、ここに本格的に成立したとすることができよう⁽⁵²⁾。象徴的に言うならば、大プランターゆえに籐椅子を所有するのではなく、籐椅子を所有するかゆえに、大プランターとみなされるようになったのである。北米植民地に成立したこの消費社会の特徴について、T・H・ブリーンは、以下の3点を指摘している。①消費財の選択幅の急激な拡大、②消費行動の標準化 standardization、③植民地市場のイギリス化 Anglicization、である⁽⁵³⁾。③についてさらに言えば、消費革命を可能にした財の多くは、主として本国から、もしくは本国を経由して植民地にもたらされたため、J・P・グリーンの指摘する社会の「複製化」、すなわち本国社会と類似した社会——この場合とくに消費様式・生活様式において——が、植民地に形成されることとなった。そもそも階層区分の明確化、階層社会の成立は、「イギリス化」の主要な指標のひとつともいえる。植民地と本国は、消費財を通じてより強く結ばれ、第一帝国は「財の帝国 empire of goods」として⁽⁵⁴⁾、内部に緊密な紐帯をもたらしたのである。もちろん植民地人は、革命期に至ると、この紐帯をむしろ逆手に利用して、本来私的な範疇に属していた消費活動を、本国製品の不買運動など、社会的抵抗の記号として解き放つことになるが、これはまだ先の話、また別の話である。⁽⁵⁵⁾

では、南部植民地、とりわけチェサピーク植民地において、この消費革命が始動し消費水準が上昇し始めたのは、いつ頃だったのだろうか。カーとウォルシュは、快適指数 (Amenities Index) を作成して、この問題に答えを与えていているが、彼女らの考案した指数とは、当時用いられていた財のなかから12種類を選び出し、それが財産目録に何種類出てくるかを調べて、その数によって消費水準の高低を計測するものである。12種の財は表6のとおりであるが、1、2は生活の便利さ・衛生の度合いを測るためのもので、3～5は食卓の洗練度を測るため、6は食生活のバラエティの度合い、7、8は教育・余暇のレベル、9～12は奢侈・ステータスの顯示の度合いを測るためのものである。ただしこの指数は、財の存在の有無だけをカウントし、質・量を問わない点に注意しなければならない。つまり、非常に安価な食卓用ナイフを1本だ

け持っている場合でも、非常に高価な食卓用ナイフを数多く所有している場合でも、数値としては同じ1となるわけである。さて、彼女らはこの快適指数を用いて、チェサピークにおける消費革命の始動を1720年代・30年代と推定しており⁽⁵⁶⁾、また後におこなった研究では、17世紀末から18世紀初めにかけて——ただし資産総額が高いほど指数も早く高い数値に達し、50ポンド以下の場合は1730年代以降——としている⁽⁵⁷⁾。これらのデータにもとづき、ウォルシュはやや印象的な判断ながらも、上流は1715年頃から、中流は1730年代までに、下層も1750年代までには消費革命に巻き込まれたのだと結論づけている⁽⁵⁸⁾。筆者は、この快適指数とは異なる手法によって消費パターンの構造転換点を探るべく、資産総額別・地域別のデータに、ステップワイズ・チャウ・テスト Stepwise Chow Test をほどこしてみた⁽⁵⁹⁾。その結果が表7である。各地域・品目とも、資産総額が大きいほど転換が早いようにも思われるが、1730年代・40年代までに構造転換が生じていることが確認され、快適指数を用いた判断との整合性は極めて高いといえよう。ちなみに、チェサピーク以外での消費革命の開始時期についてもいくつかの研究がなされており、たとえばニューイングランドに関しては、メイン夫妻がやはり快適指数を用いて1730年代から60年代にかけて——チェサピークよりも少々遅い——とし⁽⁶⁰⁾、ブリーンは印象的な判断ながら、植民地全域において18世紀半ばを指定期間としている⁽⁶¹⁾。またC・シャマスは、とくに食生活関連の財に関して、北米植民地のみならず旧大陸においても、すべての社会層を巻き込んで、18世紀半ば頃までに変化が生じ始めたとしている⁽⁶²⁾。いずれにしても、工業化の始動以前に消費革命の開始が位置づけられている点に、注目する必要があろう。

さて以上、消費革命の時期については確認されたが、その展開のメカニズムは、どのように

表7 ステップワイズ・チャウ・テストによる消費パターンの構造転換点

動産評価 総額	地域	寝具	その他の家具	調理器具	食器類	時計
£0-49	サマセット郡	1720s-30s	1720s-30s	1700s-10s	1690s-1700s	1690s-1700s
	ヨーク郡・農村	1730s	1730s	1670s	1730s	1670s
	ヨーク郡・都市	1740s	1730s	1730s	1740s	1730s
£50-225	サマセット郡	1700s-10s	1690s-1700s	1720s-30s	1700s-10s	1720s-30s
	ヨーク郡・農村	1680s	1740s	1690s-1700s	1680s	1740s
	ヨーク郡・都市	1730s	1740s	1730s	1730s	1740s
£226+	サマセット郡	1720s-30s	1700s-10s	1690s-1700s	1690s-1700s	1690s-1700s
	ヨーク郡・農村	1690s-1700s	1700s-10s	1700s-10s	1690s-1700s	1740s
	ヨーク郡・都市	1730s	1730s	1730s	1730s	1730s

表6 快適指数
(Amenities Index)

1	陶器（低品質）
2	就寝用・食卓用リネン
3	食卓用ナイフ
4	食卓用フォーク
5	陶器（高品質）
6	香辛料
7	宗教本
8	世俗本
9	かつら
10	時計
11	絵画
12	銀器類

Carr & Walsh, "The Standard of Living," 143より作成

理解されるべきなのだろうか。一般に、何らかの社会的变化が伝播するプロセスには、2とおりの経路を考えることができる。ひとつは、都市部から農村部へと伝わる地理的波及（水平の波及）であり、いまひとつは、上層から下層へと伝わる社会的波及（垂直の波及）である⁽⁶³⁾。南部植民地における当時の消費革命の展開は、主としてどちらの経路を考えればよいのだろうか。ウォルシュは財産目録の分析の結果、前者のモデルを否定し、後者を採用する。彼女によれば、チェサピークで都市部の影響力が小さく、水平の波及が機能しなかったのは、①都市の成長が遅れたこと、②都市人口が少なかったこと、③都市での社交のための財（数多くのテーブル・椅子・燭台など）は、農村部では必要なかったこと、④小売センターとしての都市の役割が小さく、農村部を顧客としていなかったこと、などがあげられるという⁽⁶⁴⁾。筆者も、資産総額において下層・中流階層に相当する農村部（サマセット郡）のデータと、上流階層に相当する農村部（ウィリアムズバーグを除くヨーク郡）と都市部（ウィリアムズバーグ）のデータでそれぞれ分割表を作成し、財産目録に投影された消費パターンの類似性を検討してみた⁽⁶⁵⁾。 χ^2 値をまとめたのが表8であり、農村部（サマセット郡）の下層・中流の消費様式が、農村部の上流（大プランター）とはよく似たパターンを示しているものの、都市部の上流（大商人等）とは異なっていることが確認され、ウォルシュの主張を支持する結果となった。つまり、チェサピークの農村部＝プランテーション世界は、都市部＝ローカルタウンを介すことなく、帝国のメトロポリス＝ロンドンと直接つながっていたのである。変化のエンジンは、表8の結果にも示されているように、農村部に居住する大プランター、すなわち rural elite によってもたらされた。彼らジェントリがメトロポリスから導入した様々な消費財、およびその消費様式が、中小プランターたちによって真似られることによって、社会層の底辺にまで浸透する、いわゆる「社会的竞争 social emulation」のメカニズムである。典型例として飲茶の習慣や砂糖の消費、フォークの使用などがあげられるが、この社会的竞争の過程には、“gentility”概念の変化、マーケティング技術の進歩、家庭観の変化など様々なファクターが関与し、消費社会への変容が促進されたのである⁽⁶⁶⁾。

同様の変化は、以上見てきた消費財に関してのみならず、生活水準の他の指標、住環境についても指摘することができる⁽⁶⁷⁾。第1章、第2章で考察したように、17世紀の住居は階層差が小さく、1720年代以前のチェサピークでは、“one-room house”がニューイングランドと比べてはるかに一般的であった。もちろん、2部屋以上の構造の家屋とは差があるものの、建築様式からすれば、いずれも“open plan”にもとづいており、家屋の主要部分——炉の置かれた居間など——に、入口から直接入って行ける造りとなっていた。これに対して、南部では1720年代以降、ニューイングランドで

表8 消費パターンの分割表による χ^2 検定

サマセット郡 動産評価総額	ヨーク郡・農村 (£226+)	ヨーク郡・都市 (£226+)
£0-49	5.566	16.382**
£50-225	3.492	14.494**

データは1768-1777年のもの

**：1%で有意

は1690年代以降から，“closed plan”の家屋が建てられるようになってゆく。いわゆるジョージ王朝様式建築 Georgian house と呼ばれる住居で、内外装は幾何学的構成をとり、各部屋はそれぞれ固定した役割を担い、最大の特徴として，“central stair hall”を持つ。ここを経由しない限り、家屋の主要部分には入れない構造で、単に部屋を分けるためだけの機能ではなく、家の中に、いわば社会的緩衝地帯を作り出したのである。“closed”と言われる所以である。むろんこの様式の住居は、上流階層のもので、前述した年代も最初期の例であり、18世紀半ばまで

表9 動産の分配に関するジニ係数

年	①	②	③	④	⑤
1638-1642	0.721				
1658-1670	0.681				
1656-1683		0.58			
1680-1689			0.481		
1683-1689	0.732				
1684-1696		0.62			
1690-1699				0.492	
1697-1704		0.65			
1704-1710			0.601		
1705-1712		0.70			
1710-1719				0.544	
1713-1719		0.72			
1730-1739			0.692	0.530	
1733					0.536
1750-1759				0.578	
1755					0.525
1763-1772			0.675		
1776					0.591
1783			0.706	0.708	

- ① セントメリーズ郡、チャールズ郡、カルヴァート郡、プリンスジョージズ郡
- ② チャールズ郡、カルヴァート郡、アンアランデル郡、ボルティモア郡、サマセット郡、ケント郡
- ③ タルボット郡
- ④ メリーランド全域（1783年は6郡）
- ⑤ プリンスジョージズ郡

Menard, "Economy and Society," 251; R. R. Menard, P. M. G. Harris & L. G. Carr, "Opportunity and Inequality: The Distribution of Wealth on the Lower Western Shore of Maryland, 1638-1705," *Maryland Historical Magazine* 69 (1974), 180; Main, *Tobacco Colony*, 55; Clemens, *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore*, 229-32; A. C. Land, *Colonial Maryland: A History* (New York, 1981), 277-80; id., "Economic Base and Social Structure: The Northern Chesapeake in the Eighteenth Century," *JEH* 25 (1965), 642; A. L. Kulikoff, "The Economic Growth of the Eighteenth-Century Chesapeake Colonies," *JEH* 39 (1979), 287; G. A. Stiverson, *Poverty in a Land of Plenty: Tenancy in Eighteenth-Century Maryland* (Baltimore, 1977), 144-45等より計算作成。

表10 土地の分配に関するジニ係数と平均土地所有面積（エーカー）

年	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
1642	0.757 913								
1659	0.639 605	0.534 570							
1671			0.418 446						
1675					294				
1680				0.462 479					
1705	0.575 457	0.530 470							
1706			0.482 519	0.552 422					
1707					360				
1776						0.613 0.839* 414			
1783		0.508 0.761* 268	0.482 0.655* 277	0.523 0.788* 419	334		0.498 0.748* 268	0.481 0.737* 284	0.512 0.765* 242

① セントメリーズ郡 ② チャールズ郡 ③ サマセット郡 ④ タルボット郡

⑤ オールハロウズ教区（アンアランデル郡） ⑥ プリンスジョージズ郡

⑦ カルヴァート郡 ⑧ カーダイン郡 ⑨ ハーフォード郡

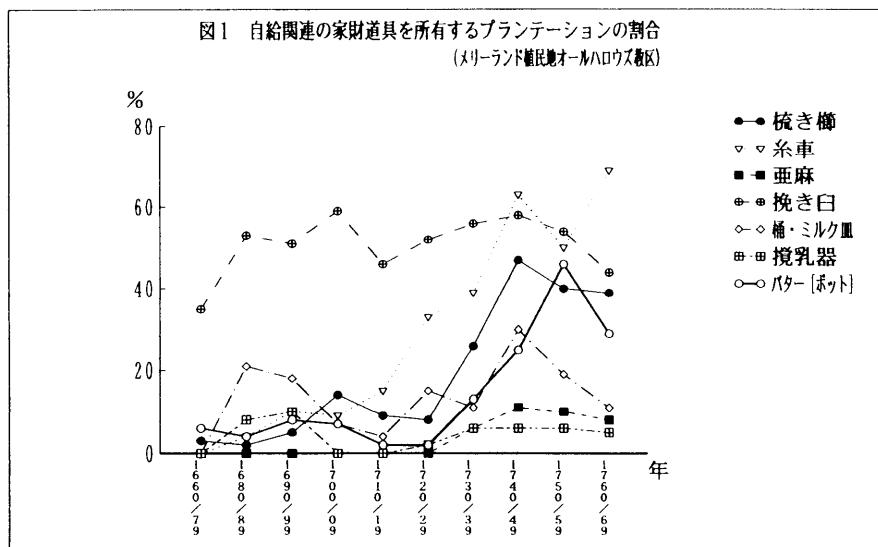
上段の数値がジニ係数、下段の数値が面積。ジニ係数は土地所有者のみを対象として算出。ただし、*のついた数値は非土地所有者も含む。平均土地所有面積の計算には借地農を含まない。

Menard, "Economy and Society," 423; Stiverson, *Poverty in a Land of Plenty*, 144-5; Clemens, *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore*, 76-7; Earle, *The Evolution of a Tidewater Settlement System*, 205; R. Forster & E. C. Papenfuse, "Les grands planteurs du Maryland au XVIII^e siècle : une élite politique et économique," *AESC* 37 (1982), 556等より計算作成。

一般的ではなかった。それ以降も、従来の“open plan”の家屋は作られ続けるが、すでに“closed plan”的住居が出現しているなかでのその記号的意味合いは、当然、以前とは異なり、ジョージ王朝様式建築に住むことのできない、それ以下の階層に属する者という、階層差のシグナルを発するようになってしまふ。“closed plan”的“central stair hall”は、それ自体、階層差にもとづく、住居への不平等なアクセスを含意していたわけだが、消費社会にあっては家自体も、有効なステイタス・シンボルとして機能したのである。

このような階層差の強化、階層社会の成立は、厳しい社会的競争の結果だともいえるが、これは社会的流動性が1680年代から1720年代にかけて低下し始めたこととも対応しており、ま

たそれと連動して富の分配が不平等化し、経済的にも保証されることとなった。すなわち植民地社会のなかでしだいに上昇が困難となり、階層が固定化されるとともに、「パイの切り分け方」が不平等化していったのである。この不平等化の進行についてはすでに別稿で論じたが、ここでは、動産（表9）、不動産（表10）のジニ係数 Gini coefficient を示すことによって、再度確認しておきたい⁽⁶⁸⁾。一方、「パイの大きさ」、すなわち世帯当たり平均の富の量は、時系列データで見るかぎり、増大が観察されるものの、その成長の大部分は不動産によるもので、消費財を含む動産の伸びはあまり大きくなない⁽⁶⁹⁾。これの意味するところは重要で、時系列上における世帯当たり（財産目録当り）の消費財への支出額——質・量を反映させない快適指数ではなく、それらを直接反映する価格表示——では、一定もしくは低下を示しているのである。同様の現象は、南部植民地のみならず、ニューイングランドにおいても確認される⁽⁷⁰⁾。このように、消費財への支出を増やすことなく消費財入手し、快適指数に見られるように消費水準を上昇させ得た理由として、ウォルシュは次の6点を指摘している。①本国におけるマーケティング、輸送、技術の進歩により、陶磁器などの消費財が、帝国内に安く大量に供給されるようになったこと、②交易条件が植民地に有利で、相対的に本国からの輸入品が安くなったこと、③植民地生まれ（ネイティヴ）の2世以降が、基本的な耐久消費財を遺産として受け継いだため、彼らの割合が17世紀末以降、人口のかなりの割合に達すると、移民世代よりもライフサイクルの早い段階で、消費財を購入することが可能となったこと、④スコットランド商人が中小プランターにもクレジットを与えたため、彼らが必需品以上の消費財を購入できるようになったこと、⑤大プランターはもとより、遠隔地に住む中小プランターも、スコットランド商人のストア制などを通じて、帝国の市場ネットワークに直接に組み込まれたこと、⑥1680年代以前にはほとん



Earle, *The Evolution of a Tidewater Settlement System*, 122-123より作成

どみられなかった、食料以外の自家生産・家内生産が盛んになり、衣服などの基本的な消費財に関して輸入品に代替したこと、である⁽⁷¹⁾。最後の自給化の進展については、たとえば財産目録のなかで関連の品目が出現する割合が増大することからも確認されるが（図1）、一方で消費社会の進展とは逆のヴェクトルも有しており、若干注意が必要である⁽⁷²⁾。ともあれ、以上のような理由から、人々は消費財への支出額、伝統的な支出パターンを大きく変化させることなく、消費水準の上昇を実現し、他方で、不動産を含む資本財への支出を増やし続けることができたのである。つまり、消費革命とは、経済成長にマイナスでないどころか、生活様式を変化させ、生活水準を向上させることによって、工業化へと連なる需要創出の文化的基盤を提供したのだということができよう。

おわりに

「はじめに」でふれた植民地総督らの3遺体は、正確な墓標のもとに埋め戻され、再び静かな眠りにつくという。しかし、彼らによって生きられた過去のありし日々を、その日常生活の細部にいたるまで復元しようとする試み、すなわち当時の生活水準をめぐる諸研究は、これからも学際的規模で多くの成果を生み出すにちがいない。死者は眠りにつくが、生きられし過去は、今、よみがえりつつあるのだといえよう。

註

- (1) TIME (April 18, 1994 No.16), 41.
- (2) N. Kendrick, J. Brewer & J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England* (London, 1982); J. Brewer & R. Porter, eds., *Consumption and the World of Goods in the Seventeenth and Eighteenth Centuries* (London, 1993)など。わが国では、川北稔『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』（岩波書店, 1983）第11章、同『洒落者たちのイギリス史——騎士の國から紳士の國へ——』（平凡社, 1986）など。
- (3) 第2章で詳述するが、とりあえず C. Shammas, *The Pre-industrial Consumer in England and America* (Oxford, 1990).
- (4) L.G. Carr, “Emigration and the Standard of Living: The Seventeenth Century Chesapeake,” *JEH* 52 (1992). この論文は、カーのアメリカ経済史学会会長就任演説。
- (5) “Forum: Toward a History of the Standard of Living in British North America,” *WMQ* 45 (1988). 内容は、L.S. Walsh, “Questions and Sources for Exploring the Standard of Living,” G. L. Main, “The Standard of Living in Southern New England, 1640-1773;” L.G. Carr & L.S. Walsh, “The Standard of Living in the Colonial Chesapeake;” J.T. Main, “Summary: The Hereafter;” B.G. Smith, “Comment;” J.J. McCusker, “Comment.” R.E. Gallman & J.J. Wallis, eds., *American Economic Growth and the Standard of Living before the Civil War* (Chicago, 1993)所収のウォルシュのサーvey論文も参照。
- (6) このモラルエコノミーとマーケットエコノミーの論争については、たとえば、T.H. Breen, “An

Empire of Goods: The Anglicization of Colonial America, 1690-1776,” *Journal of British Studies* 25 (1986) を参照。

- (7) Walsh, “Questions and Sources,” 117-123.
- (8) 栄養摂取と身長との関連については R·W·フォーゲルが精力的に研究を進めているが、年季契約奉公人を分析対象としたものとして、J.Komlos, “A Malthusian Episode Revisited: The Height of British and Irish Servants in Colonial America,” *Economic History Review* 46 (1993) がある。
- (9) 拙稿「南部白人社会の安定化」(歴史学研究会編『南北アメリカの500年(第1巻)「他者」との遭遇』青木書店, 1992), 同「プランターは何を食べていたのか?——アメリカ植民地時代の食料事情——」(『追手門学院大学文学部紀要』27号, 1993) など。
- (10) この点に関しては多くの研究が触れているが、とりえず G.L.Main, *Tobacco Colony: Life in Early Maryland* (Princeton, 1982), 282-292. なお、以下にあげる4点のほか、南部植民地に固有の問題点として、不動産記載の欠如がある (*ibid.*, 49.).
- (11) メリーランド植民地における財産目録の通貨単位は、次のように変遷している。1659年以前: データ欠如, 1659年-1682年: タバコ表示, 1680年-1715年: スターリング表示, 1715年以降: メリーランド・カレンシー表示 (R.R.Menard, “Economy and Society in Early Colonial Maryland” (Ph.D.diss., Univ. of Iowa, 1975), 465-468.)
- (12) 為替レートは、J.J.McCusker, *Money and Exchange in Europe and America, 1600-1775: A Handbook* (Chapel Hill, 1987). ただし、スターリングとメリーランド・カレンシーのレートについては、C.V.Earle, *The Evolution of a Tidewater Settlement System: All Hallow's Parish, Maryland, 1650-1783* (Chicago, 1975) も利用価値が高い。17世紀のタバコ価格は、R.R.Menard, “The Tobacco Industry in the Chesapeake Colonies, 1617-10: An Interpretation,” *Resarch in Economic History* 5 (1980); id., “Farm Prices of Maryland Tobacco, 1659-1710,” *Maryland Historical Magazine* 68 (1973).
- (13) 研究者によって様々な物価指数が作成されているが、古典的なものとして、P.G.E.Clemens, *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore: From Tobacco to Grain* (Ithaca, 1980), 228所収のP·M·G·ハリスの物価指数がある。
- (14) この詳細な研究は、L.G.Carr, R.R.Menard & L.S.Walsh, *Robert Cole's World: Agriculture & Society in Early Maryland* (Chapel Hill, 1991). 以下に述べる彼の経歴等については、*ibid.*, 1-12, 248-249.
- (15) この点について同様の記述は、Colonial Williamsburg, ed., *The Wigmaker in Eighteenth-Century Williamsburg: An Account of his Barbering, Hair-Dressing, & Peruke-Making Services, & some Remarks on Wigs of Various Styles* (Williamsburg, 1987), 1にもある。
- (16) この3点の史料はすべて Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole's World*, Appendix 1に収録されており、原文に遡って確認できる。
- (17) 遺言状に、“... I Robert Cole of St Clements Bay in the Province of Maryland Yeaman (sic) being in Good health...” とある (*ibid.*, 170)。
- (18) *Ibid.*, 28.
- (19) *Ibid.*, 98-102.
- (20) 17世紀の社会階層区分の詳細については別稿を考えているが、簡単には、上層から①ジェントリ(大プランター・大商人), ②ヨーマン・プランター(中小プランター), ③借地農, ④寄宿人, ⑤奉公人, ⑥黒人奴隸、となる。白人は①~⑤、黒人は⑥、自由民は①~④、不自由民は⑤・⑥、世帯を形成しているのは①~③、未形成は④・⑤である。階層区分についての言及は、たとえば *ibid.*, 21-31など数多い。

- (21) *Ibid.*, 77-81.
- (22) *Ibid.*, 84-90.
- (23) たとえば、灰汁が容易に入手できるにもかかわらず、石鹼を家で作らず購入する点についての指摘は、T.H.Breen, “‘Baubles of Britain’: The American and Consumer Revolutions of the Eighteenth Century,” *Past & Present* 119 (1988):79.
- (24) Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole’s World*, 90-94. また、Main, *Tobacco Colony*, 140-166も参照。当時の部屋・建物の名称を、財産目録での出現頻度順に挙げると次のようになる。chamber, kitchen, hall, store, milkhouse, quarters, porch, parlor, closet, cellar, inner room, outer room, loft, shed, buttery, garret, study (*ibid.*, 293-294). 同じ名称の部屋・建物でも英米で意味に違いがあったが、この点については、*ibid.*, 293-295. 南部では当時の家屋はほとんど現存していないが、忠実に再建されたものとして、Historic St. Mary’s City の Godiah Spray Tobacco Plantation がある (H.Wiencek, *The Smithsonian Guide to Historic America: Virginia and the Capital Region* (New York, 1989), 288-289など)
- (25) 註(9)を参照。
- (26) Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole’s World*, 94-97.
- (27) 以下、家財道具に関しては、*ibid.*, 97-107.
- (28) 錫を主成分とする、鉛などとの合金。リサイクルされるので、しばしば発掘調査の対象となるゴミ捨て穴からは出土しない (Gallman & Wallis, eds., *American Economic Growth*, 240.)
- (29) Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole’s World*, 107-108. Appendix 1 の註も大いに参考となる。また、主として 18 世紀を対象としているが、よくまとまった服飾史の概説として、L.Baumgarten, *Eighteenth-Century Clothing at Williamsburg* (Williamsburg, 1986) がある。
- (30) Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole’s World*, 108-109.
- (31) 以下、*ibid.*, 326-327.
- (32) *Ibid.*, 111-112; L.S.Walsh, “Urban Amenities and Rural Sufficiency: Living Standards and Consumer Behavior in the Colonial Chesapeake, 1643-1777,” *JEH* 43 (1983): 110; Carr, “Emigration and the Standard of Living,” 281.
- (33) E.P.Alexander, ed., *The Journal of John Fountaine: An Irish Huguenot Son in Spain and Virginia, 1710-1719* (Williamsburg, 1972), 86.
- (34) たとえば、T.H.Breen, “Persistent Localism: English Social Change and the Shaping of New England Institutions,” *WMQ* 32 (1975) など。
- (35) 以下、J.Horn, “Adapting to a New World: A Comparative Study of Local Society in England and Maryland, 1650-1700,” in L.G.Carr, P.D.Morgan & J.B.Russo, eds., *Colonial Chesapeake Society* (Chapel Hill, 1988), 138-141.
- (36) *Ibid.*, 142-143.
- (37) *Ibid.*, 149-150.
- (38) 計算に使用した資産構成分布のデータは *ibid.*, 143, 150 から採り、メリーランドは 1658-1705 年、バークレー渓谷は 1660-1699 年のもの。検定結果は、 $\chi^2=1.508$, df=3, p=0.680.
- (39) *Ibid.*, 151.
- (40) 計算に使用したデータは *ibid.*, 158-159, 162-163 から採り、メリーランドは 1658-1699 年、バークレー渓谷は 1660-1699 年のもの。
- (41) 計算に使用したデータは、同上。
- (42) 「椅子類ナシ」の項目は、椅子類という家財道具の「非所有」を含意している点で、他の品目とは逆の関係にある。したがって、ひとり数値にマイナスの符号が付されているが、これはむしろ当然で、

本文の論旨の強力な証左となっている点に留意する必要がある。

- (43) *Ibid.*, 161.
- (44) *Ibid.*, 152-154; Main, *Tobacco Colony*, 166. ただし、ホーンは、メイン以上に、英米での住環境の差を強調している。
- (45) Horn, "Adapting to a New World," 157-159.
- (46) たとえば、Carr, "Emigration and the Standard of Living," 271. および、拙稿「プランターは何を食べていたのか？」, 241-242 頁。
- (47) グリーンのいわゆる「発展モデル」によれば、植民の初期は本国から受け継いだ社会の「単純化」が生じ、次いで第2段階として社会の「複雑化」がおこる。これは植民地環境への適応のプロセスであり、最終段階として本国社会の「複製化」に至るとされる。拙稿（書評）「Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture*」（『西洋史学』157号, 1990）参照。
- (48) G.L.Main & J.T.Main, "Economic Growth and the Standard of Living in Southern New England, 1640-1774," *JEH* 48 (1988); G.L.Main, "The Standard of Living in Colonial Massachusetts," *JEH* 43 (1983); id., "The Standard of Living in Southern New England."
- (49) Carr, Menard & Walsh, *Robert Cole's World*, 93-94, 114-117. ホーンは南部植民地で生活水準が低かった理由として、①移民が短命であったこと、②1680年代からの不況、③本国商人への依存度の高さ、の3点を指摘している（Horn, "Adapting to a New World," 161, 163）。
- (50) たとえば、Walsh, "Urban Amenities and Rural Sufficiency," 110-111.
- (51) グリーンは、植民地には本国ほど複雑な社会階層は出現せず、大まかに“independents”と“dependents”的2種類の階層が成立したとする。ただしそれぞれの内部の分化は指摘しており、前者は、①上流階層（大プランター、大商人、大地主、法律家等）、②中流階層（ヨーマン・ファーマー、職人、商人、下級専門職等）から成り、後者は、①中間層（借地農、契約労働者等）、②自由労働力、③奉公人、④奴隸、から成る。また彼は、植民地では上位約3分の2、本国では約4分の1の人口が、消費革命に巻き込まれたとしている（J.P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture* (Chapel Hill, 1988), 186-194.）
- (52) この点に関しては、川北、前掲書（註(2)参照）に詳しい。
- (53) Breen, "Baubles of Britain," 79.
- (54) ブリーンの表現（註(6)参照）。
- (55) Breen, "Baubles of Britain," ch.2.
- (56) L.G.Carr & L.S.Walsh, "Inventories and the Analysis of Wealth and Consumption Patterns in St.Mary's County, Maryland, 1658-1777," *Historical Methods* 13 (1980):95.
- (57) Carr & Walsh, "The Standard of Living," 137-138, 151.
- (58) Walsh, "Urban Amenities and Rural Sufficiency," 110-111.
- (59) 計算に使用したデータは *ibid.*, 114-115 からとった。チャウ・テストとは、回帰方程式のすべての係数が計測期間を通じて一定の値であったかどうかを調べるもので、構造変化が生じている場合、F値は大きくなり、赤池情報量AICは小さくなる。表7では、F値とAICの双方を勘案して、構造転換の時期を決定した。
- (60) Main & Main, "Economic Growth and the Standard of Living," 44.
- (61) Breen, "Baubles of Britain," 78, 79, 85, 92など。
- (62) C.Shammas, "The Domestic Environment in Early Modern England and America," *Journal of Social History* 14 (1980): 13-14, 18.

- (63) 川北『工業化の歴史的前提』、358 頁。
- (64) Walsh, "Urban Amenities and Rural Sufficiency," 113.
- (65) 計算に使用したデータは *ibid.*, 114-115 からとった。
- (66) "gentility" 成立の要因に関して、カーとウォルシュは次の 3 点を指摘している。①ファッショ・
奢侈の追求、②①を促進した経済的・技術的变化、③①の展開を支えた社会的竞争、である。マーケティング技術の進歩についても、次の 3 点を指摘している。①新しい商品の入手可能性の拡大、②広域市場に商品を届ける流通システムの確立、③消費者にアピールする広告・展示方法の発見、である（以上、Carr & Walsh, "The Standard of Living," 142.）。シャマスによれば、従来は家庭で作り自給していた品物を、市場で購入することによって家庭環境を向上させ得るとの観念が、多くの地域で生じてきたとされる（Shammas, "The Domestic Environment," 18.）。
- (67) 以下、B.L.Herman, "Home and Hearth: The British Colonies," in J.E.Cooke, *et al.* eds., *Encyclopedia of the North American Colonies*, vol.2 (New York, 1993).
- (68) 拙稿「メリーランド植民地社会の展開——労働力転換を軸として——」（『西洋史学』143号、1986）、
第 3 章、第 4 章。ジニ係数は、ローレンツ曲線と均等分布線が囲む面積の 2 倍の値をとり、値が 0 のとき完全平等分配を意味し、大きくなるほど不平等度が増し、1 のとき完全不平等分配となる。
- (69) 同上、図 8 参照。
- (70) Main & Main, "Economic Growth and the Standard of Living," 44.
- (71) Walsh, "Urban Amenities and Rural Sufficiency," 113, 116.
- (72) 自給化の進展に関しては、拙稿「タバコ植民地経済の展開——独立革命への経済的前提——」（『史林』第 70 卷・第 5 号、1987）、72-74 頁。シャマスも、チェサピークではニューイングランドと比べて、自給化へのより大きなシフトが見られたとしている（Shammas, *The Pre-industrial Consumer*, 68-69.）。

（本稿は、平成 5 年度科学研究費補助金奨励研究（A）による成果の一部であり、関西アメリカ史研究会第 32 回大会（平成 6 年 11 月）における報告に加筆・修正したものである）